

# 県外派遣報告書

審判員名（報告者）	堀口 拳	所 属	U18 西部
大会名	第 101 回天皇杯・第 92 回皇后杯全日本バスケットボール選手権大会セカンドラウンド		
期 間	2025年 11月29日 ～ 30日		
会 場	リリーアリーナ MITO		
ス ケ ジ ュ ー ル			
期 日	内 容	場 所	
11月26日	審判会議	ZOOM 会議 参加者自宅他	
11月29日	男女1回戦	リリーアリーナ MITO	
11月30日	男女準決勝、決勝	リリーアリーナ MITO	
審判会議、研修会 講義内容			
<p>(1) 挨拶</p> <p>○一般社団法人茨城県バスケットボール協会専務理事 中村宏 様</p> <p>○関東バスケットボール協会 審判委員長 平原勇次 様</p> <p>○一般社団法人茨城県バスケットボール協会 審判委員長 一色涉 様</p> <p>(2)指名審判員講義</p> <p>○東京都バスケットボール協会 S級審判員 田久保藍子様</p> <p>S 級を目指す皆さんへ</p> <p>①自分がどのようにして S 級となり、現在のママレフリーに至るか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちたとき →ホッとした</li> <li>・受かったとき→覚悟を決めて受かりにいった</li> <li>・復帰を決めたのは→子供の記憶に残るまで続けてほしい（家族の言葉）</li> <li>・なぜ続けられているのか→家族の理解、サポート→ママレフリーを受け入れてくれる環境→恩返し、目標に挑戦する気持ち</li> </ul> <p>②今の日常、審判への備え方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体力作り</li> <li>・映像チェック</li> <li>・週末のスケジュール管理</li> </ul> <p>○埼玉県バスケットボール協会 S級審判員 眞榮喜工様</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バスケットが好きだということを忘れずに審判活動を</li> </ul> <p>【準備・実践・振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ロスターチェック(スタッフも)・スタッツ・前節映像確認</li> </ul> <p>【ゲーム】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・明らかなものをコツコツと</li> <li>・クルーで準備してきたことと、目の前で起きていることの照合</li> <li>・表現する必要があるかどうかの判断(試合のために自分がいる)</li> <li>・ゲームのために飛び込む勇気</li> <li>・クルーでの確認</li> <li>・映像確認→FOUL log</li> </ul>			

【スケジュール】

- ・誰かのスケジューリングが自分の参考になることなんてほぼない
- ・今、自分の置かれている環境や自分のいるステージ
- 全て自分が選んだこと→できないことを探さずにできることを探す
- 環境を変える選択をするかどうか自分次第→真似できることは参考に
- そうでないことは羨んでも自分を卑下しても意味がない→自分の強み、自分にできることを最大限

(3)連絡事項

- ・各係からの連絡(会場・輸送・宿泊・総務・その他)

担当試合①

期 日	11月29日(土) 男子1回戦
対戦カード	ポリアルブルツァス(茨城) vs ROYALS(群馬)
ク ル -	CC:堀口拳 U1:武井晋平氏(栃木) U2:大川尚氏(千葉)
ミーティング内容	審判主任:東祐二氏

▶ゲーム前の PGC

- ・メカニクスの確認
- ・チーム情報共有
- ・クロックの確認について

▶ゲーム後のミーティング

オフボールのスクリーンやつかみ合いに目が当たっておらず判定できていないケースが散見された。ボール中心の視野になり、メカニクスの連動が遅くなっていることが原因だと考えられる。トレイルでのチェックアウトをスムーズにし、センターで見るべきものを早く捕らえられるようにする。選手がリアクションで大きく倒れるケースがいくつか見られた。フェイクの判定を適切にしたいところであった。全体として、ただ判定するだけでなく、選手やベンチの心情や、ゲームの流れをより理解したうえで笛を吹けるようにしたい。

担当試合②

期 日	11月30日(日) 男子決勝
対戦カード	白鷗大学(栃木) vs 大東文化大学(埼玉)
ク ル -	CC:大野太裕氏(茨城) U1:沖田裕毅氏(神奈川) U2:堀口拳
ミーティング内容	審判主任:東祐二氏

▶ゲーム前の PGC

- ・メカニクスの確認(ヘルプ DF のプライマリー、ブレンジ)
- ・プレイコーリング(手の使い方、つかむ、シリンダー)
- ・チーム情報共有

▶ゲーム後のミーティング

コミュニケーションの仕方に課題が見られるゲームとなった。肘が顔に入ってしまった、OF ファウルの判定となった際、ベンチからは「しょうがない、事故だ」と主張があった。スムーズに返答することができずベンチを納得させることができなかった。IR の東氏からは「事実ベースに話をするしかない。」とお話をいただいた。丁寧に端的に事実を伝えていくことを心掛けたい。また、CC の大野氏からは、「逆ベンチからなぜアンスポでないのかと問われたらどうするかも用意しておくべき」とお話をいただいた。事象の説明は両ベンチのために2パターン用意しておくこととよいことであった。トップリーグで多くのコーチ陣とコミュニケーションをとってきているレフェリーの方々のアドバイスを聞くことができ非常に学びになった。

## 全体の感想

本大会では、男子1回戦と男子決勝の試合を担当させていただきました。1回戦では、実業団とクラブの試合という異種格闘技戦となる試合でした。選手やベンチの感じ方、考え方が両チームで異なる中、基準の示し方や会話の仕方が非常に難しいと感じました。また、CCとしてゲームをどう運営していくべきか、起きた現象をただ吹くだけでなく、どのようにゲームを進めていきたいかをより示していく必要があると思わされる試合でした。2日目の男子決勝では、大学生同士の試合となりましたが、普段吹いているリーグ戦とはまた異なった雰囲気と、大きな緊張感を抱えながら試合に入りました。日頃トップリーグを最前線で担当されている方とクルーをともにすることができ、考え方、吹き方、振舞い、ゲームコントロールなど、同じコート上で多くを学ぶことができました。個人としては、「自分がCCだったら・・」との観点で振り返った時に、おそらく自分のこと、目の前の現象に必死で、コントロールやコミュニケーション、インテンシティのことまでなかなか考えが及ばず、今回のように無事に終わらせることは難しかったのではないかと感じます。2試合を通しての課題は、「どのように試合を進めていくか、コントロールできるかにより焦点をあて、アプローチできるようにならないといけない」ということだったように思います。今後どのカテゴリーを吹くにしてもそういった考えを持ち取り組んでいきたいです。

多くの審判員の皆様と一緒に試合を見させていただき、お話を聞くことができました。指名審判員の田久保様、眞榮喜様のお話を含め、トップフェリーが普段どういったことを感じながら試合を運営しているのか、どのように審判業に取り組んでいるのか、その一端に触れられたことは非常に貴重な時間でした。試合を判定する技術だけでなく、そこに近づこうとする覚悟が自分にあるのか、自分はどのようなかを改めて考える必要があると感じています。

最後になりますが、この度ご派遣いただきました埼玉県審判委員長眞榮喜様、大会期間運営にご尽力いただきました茨城県バスケットボール協会の皆様、審判担当の一色様をはじめとした審判員の皆様、割当クルーやTO役員、その他大会に関係するすべての皆様に改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

※本報告書の体裁は報告者自身にて自由に変更いただき問題ありません。分かりやすいよう図や写真を入れることも可能です。

※派遣報告書は、派遣行事終了後の翌木曜日を以てPDF化して、下記へ送付をお願いします。

宛先 ; [sbareflicense2020@gmail.com](mailto:sbareflicense2020@gmail.com)

CC ; 眞榮喜部長、各カテゴリー長

# 県外派遣報告書

審判員名(報告者)	藤林 比登美	所 属	U18東部 カテゴリー
大会名	第101回天皇杯・第92回皇后杯全日本バスケットボール選手権大会 セカンドラウンド		
期 間	2025年 11月29日 ~ 30日		
会 場	リリーアリーナ MITO		
ス ケ ジ ュ ー ル			
期 日	内 容	場 所	
11月 26日	審判会議、研修会	ZOOM 会議 参加者自宅他	
11月 29日	1回戦	リリーアリーナ MITO	
11月 30日	準決勝・決勝	リリーアリーナ MITO	
審判会議、研修会 講義内容			
【レクチャー】			
●田久保 藍子氏			
<b>審判人生について</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・S級審査に落ちた時、受かった時に感じたことは、「覚悟」が決まっているかどうか。</li> <li>・審判が全てではないので、他のことにもしっかり取り組む。その内容は人それぞれ。</li> <li>・受かってからは、トップリーグを担当、FIBAアジアへの派遣。→その後、出産と育児のため活動休止。</li> </ul>			
<b>活動休止後、正式な復帰を決めた理由</b> (やらない決断はたくさんできた)			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の記憶に残るまで続けていく。・トップリーグの舞台にもう一度立ちたいという想い。</li> </ul>			
<b>なぜ、大変だけれど続けられているのか？</b>			
家族の理解やサポート／ママレフリーを受け入れてくれる環境／恩返し of 気持ちと目標に挑戦する気持ち			
<b>審判への備えについて</b>			
体力作り／映像チェック／週末のスケジュール管理			
この厳しい環境を過ごせるのは家族や友達、仲間のおかげ。			
“人とのつながりを大切に”			
●眞榮喜 工氏			
<b>準備・実践・振り返りについて</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロスターチェック／スタッツ／前節映像確認・・・</li> <li>・明らかなものをコツコツ積んでいく。</li> <li>・クルーで準備してきたことと、目の前で起きていることを照合。</li> <li>・表現する必要があるかの判断 (試合のために自分があることを忘れない)</li> <li>・ゲームのために飛び込む勇気。</li> </ul>			

- ・クルーでの振り返り。
- ・映像確認、Foul log（判定／メカニクス／ゲームコントロール）
- ◎映像をみることも大切だが、クルーや IR が客観的にどう感じていたのかその場で聞くことも必要。  
→感覚と視点がどうだったのか。

### 一週間のスケジュールについて

- ・今、自分の置かれている環境、自分にステージの中で、できることをやっていく。
- ・「これからなりたい姿、立ちたいステージ、真似られることはあくまで参考。自分の強み、自分にできることを最大限に発揮する。
- ・トップリーグや上の舞台に立ちたいのであれば、自分が選んで進んでいく。

**正しく強いチームを導いていく**（×「強かろう正しかろう」）

#### 担当試合①

期 日	11月29日（土） 1回戦 女子
対戦カード	日本航空高等学校（山梨） vs 拓殖大学（東京）
ク ル ー	CC：飯田 はるか氏（神奈川） U1：野口 祐子氏（千葉） U2：藤林 比登美（埼玉）

ミーティング内容 審判主任：東 祐二氏（IR）

#### ▶ゲーム前の PGC

チーム情報の共有／ベーシックなメカニクスについて確認  
高校生 v s 大学生のフィジカルの違い、影響の出方

#### ▶ゲーム後のミーティング

全体として、もっとタフにゲームを進めても良かったのではないかと。カテゴリーの違いはあるが、高校生もフィジカル負けせずに戦うことができていた。フィジカルの違いという点を踏まえた PGC での意図は伝わったが、いざ試合が始まってみて対応を変えることも必要である。大学生ベンチとしては、チープな笛にストレスが溜まっている様子も伺えた。

個人の反省として、POC にこだわりを持つこと。特に、プッシングで片づけてしまっているケースが非常に多く、もう一度動画をみて振り返りを行うこと。また、判定をした際に肩をすくめているのは勿体ないので、胸を張るなど、立ち姿を工夫することをご指摘いただいた。

#### 担当試合②

期 日	11月30日（日） 決勝戦 女子
対戦カード	共栄大学（埼玉） vs 江戸川大学（千葉）
ク ル ー	CC：田久保 藍子氏（東京） U1：山崎 律子氏（茨城） U2：藤林 比登美（埼玉）

ミーティング内容 審判主任：平原 勇次氏（本部）

#### ▶ゲーム前の PGC

チーム情報の共有／メカニクスについて／クルーワークについて

#### ▶ゲーム後のミーティング

余計な笛がなく、スムーズにゲームが進んでいた。難しいケースも特にはなかった。ゲームの始まりから CC、U1 のテンポセットに乗っかるようにコールを重ねていけたのはよかった。

個人の講評としては、フィジカルについてタフに進めることやアウトサイド周りの手の使い方の整理はゲームにマッチしていた。しかし、留学生同士の高さのあるゴール下のシュートについて決断ができない場面があった。A 級として、「決めていく」ことを実践していけると良い。自分の中で確固たる判定基準を持ち、示していくことを心掛ける。留学生がいるゲームはこの先もたくさんあり、強さを出して決断することにチャレンジしていく必要がある。

## 全体の感想

この度は天皇杯・皇后杯選手権大会セカンドラウンドに派遣していただき誠にありがとうございました。

今回の派遣では、関東で一番を決める大会の決勝戦にかかわる貴重な機会をいただき、非常に大きな学びとなりました。また、派遣された全員が A 級以上という環境の中で、自身の判定基準やゲームコントロールの質を改めて見直すことができました。試合前後のミーティングや判定の共有を通して多くの刺激を受けることができ、意欲の高い参加者の皆様から学ぶことも多くありました。

最後になりますが、眞榮喜審判部長をはじめ、埼玉県審判部の皆様、本大会に派遣いただきありがとうございました。そして、一色様をはじめとする茨城県バスケットボール協会審判部の皆様、関東ブロック審判長平原様、IR でお越しいただきました東様、ご講義いただきました指名審判員 田久保様、眞榮喜様、大会期間中にお世話になりました全ての役員の皆様に感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。